研　究　紀　要

教　育　相　談　部　会

〔講　　演〕
「不登校の現状と課題」
奈良女子大学大学　　教授　伊藤　美奈子 ……………………………… 1

部 会 の 動 き ……………………………………………………………………………………… 14

研 究 テ ー マ ……………………………………………………………………………………… 15

紀要編集委員　　島　村　千　景（青森県立弘前実業高等学校）

教 育 相 談 部 会

実践発表１

「不登校の現状と課題」

奈良女子大学　教授　伊藤　美奈子

第１部　不登校と教育機会確保法

１．不登校に対する国の指針の変遷

まず、国の不登校に対する方針がどのように変化してきたかを整理したい。不登校が日本の社会で話題になり始めたのは 1950 年代後半で、すでに 60 年以上が経過している。1960 年頃、日本は高度経済成長期の真っ只中にあり、戦後復興に向けて多くの人々が努力していた時代で、学歴をしっかりつけて社会で成功したいという風潮が強かった。この時期、学校に行けるのに登校しない子どもたちは少数派とされ、周囲からの理解を得られないことも多かった。当初、不登校の原因は心の病気とされ、学校への恐怖心が原因であると考えられており、児童精神科医による治療が主な対応であった。これが不登校に対する初期の対応であった。

しかし、1960 年代から 80 年代にかけて不登校の子どもたちが増加し、次第に不登校は特別な病気ではなく教育問題の１つとして扱われるようになった。呼び方も「学校恐怖症」という呼称から「登校拒否」へと変わり、1980 年代には「登校拒否」という言葉が一般的になった。当時の子どもたちは、学校や勉強の話題になると非常に苦しむ傾向があり、学校に行けないことで悩み、葛藤している子どもたちが多く、登校を考えるだけで頭痛や腹痛や吐き気などの神経的な不調を訴えることが多かった。こうした悩みを抱える子どもたちに対し、国は 1992 年に出した報告書で、『不登校はどの子にも起こり得る』と述べ、心の健康が重視されるようになった。神経症的な不登校の子どもたちには、できるだけ刺激を与えずに待つことが重要だとされ、国は「待つ」「見守る」、また「登校を強制しない」といったアプローチを提唱し、登校に対する考え方を示した。

ところが、その後も不登校の子どもたちの数は増え続け、2000 年にかけてはその内容も多様化していった。不登校は単に「登校拒否」ではなく、いじめや虐待が背景にある場合も増えてきた。神経症的な不登校だけではなく、異なるタイプの子どもたちが出てきた。こうした状況を受けて、2002 年には不登校問題に関する調査研究協力者会議が開かれ、議論が進む中で「待つだけでいいのか」という問いが浮かび上がった。最近の状況では、いじめや虐待といった問題が関与している場合もあるため、ただ待っているだけでは不十分という認識が広まり、従来の「待つ」姿勢に加え、適切な働きかけが必要との方向性が示された。適切な働きかけとして重要なのは「正しいアセスメント」だとされ、子どもたちの不登校の状況を正確に把握し、いじめや家庭環境などを考慮した上で、その子に合った支援を考えることが求められた。この方針の転換がなされたのは 2003 年３月のことで、この時期以降、不登校の数は少し落ち着いた印象を受けた。

だが、最近では不登校の子どもが再び増加しており、特に小学校低学年において急増している。中学生や高校生の間でも増加がみられており、国が危機意識を持ち、対策を講じる必要性が高まった。2016 年に制定された「教育機会確保法」では、不登校というだけでは問題行動と見なさず、子どもたちの学習権を保障することが明記され、学校の外にも多様で適切な教育機会を増やし、子どもたちの学びを支える方向性が示されている。この法律は、学校復帰だけが目標ではなく社会的自立を重視しているところが特徴である。

不登校の子どもたちの中には、学校をサボっている、怠けていると自らを責める気持ちを抱える子も多く、また、保護者も、育て方が悪かったのではないかと悩むことが少なくない。「不登校は問題ではない」と示すことが不安を和らげる一方、その不安や心配が完全になくなるわけではなく、学校現場では、問題ではないのなら、そのままでいいのか？何もしなくていいのか？という疑問が生じることもある。この法律は、「その子ども自身が問題児ではない」とするものであり、学校に行けない背景にある要因（いじめや学業の悩み、部活動でのトラブルなど）への理解と支援は求められている。子どもが不安を抱えていることや将来への不安に対する〈継続的支援〉や〈進路の見通し〉の支援は特に重要である。

２．多様化する現代社会における不登校

不登校には、友人関係や教師との関係、いじめ、発達障害、学業、部活動など多様な背景が存在する。不登校と一括りにされがちだが、実際には多様な背景があることを理解しておく必要がある。

① 友人関係や教師との関係、いじめ

特に、いじめが原因で不登校になることは重大事態であり、いじめが原因で自殺に至るケースもあるため、適切な対応や調査、早期に問題を解決することが求められる。

② 発達障害

発達障害があるからといって、すべての子どもが不登校になるわけではないが、周囲がその障害を理解できなかったり、特定の苦手さやこだわりがあったりすることで、人間関係がうまくいかず、結果的に不登校になることもある。発達障害を抱えていても、学校が適切に対応し、親の理解があれば、学校が大好きで毎日通う子どももいるが、周囲の理解が不足することがリスク要因となることがある。

③ 学業

多くの先生方が直面する不登校のケースの１つである。勉強についていけずに辛くなってしまうパターンが多いが、中には勉強がつまらないと感じ、本来はもっと先に進みたいと思っている子どももいる。学校の授業は一般的に一斉授業であり、自分のペースや興味に合わないことが多い。このような子どもたちは、知的な能力が高いギフテッドの子どもたちに見られ、周囲とのミスマッチが原因で不登校になることがある。

④ 部活動

特に中高生にとって、部活は大きな意味を持つ。部活動での人間関係、先輩後輩の関係、レギュラーと控えの立場などが原因で学校に行けなくなる子も少なくない。部活動には光と影があることを感じる。

⑤ 精神的な問題

中高生、とりわけ高校生はさまざまな精神疾患を抱えることがある。例えば、うつ病や対人恐怖症、不安障害、摂食障害、そして統合失調症などがその例である。これらの病気が原因で学校に行けなくなることがある。その場合、学校の対応だけでなく、病気の治療も同時に行う必要がある。最近は、朝に血圧が下がり起きられない、または起きてもふらふらするという症状が出る起立性調節障害と呼ばれる病気を抱える子どもも増えてきている。これは身体的な病気であるが、心因性の要素も含まれているため、心と体の両面からの治療が求められる。

⑥ 性的マイノリティ

LGBTQ+の子どもたちは、性自認や性的指向に関する困難を抱えている子が多くいる。例えば、女の子として生まれたが男の子として生きたいと望むケースなどがある。このような子どもたちは、自身の性別の認識と社会の期待との間にギャップがあることで、さまざまな苦痛を感じることがある。具体的には、制服の問題や更衣室、トイレの利用が苦痛であるといった経験がある子どももいる。学校によっては、誰でもトイレを用意しているところもあるが、そうでない学校もあり、利用する際には勇気が必要である。このような状況にある子どもたちにとって、学校はさまざまな意味で生きづらい環境となっている。そうでない子どもたちに比べ、不登校のリスクや自傷、自殺のリスクも高い傾向がある。実際には、多くの子どもたちがさまざまな形で悩みながら生きており、その中にはクラスの中に数%、潜在的に不登校のリスクを抱えた子どもたちがいる。

⑦ ゲーム依存

最近ではゲーム依存に関する相談も多くなっている。朝までゲームに没頭することで、結果的に起きられなくなり、不登校になってしまうケースも多い。しかし、ゲーム依存が不登校の原因だと考えるのは一面的な見方である。実際には、不登校になった結果、時間ができ、その時間を埋めるためにゲームやYouTubeなどに没頭することがあり、ゲームは子どもたちにとって逃げ込める場所であるため、それを取り上げられると非常に辛くなってしまう。ゲームを取り上げるという単なる対処方法では、かえって親子関係を悪化させてしまうことがある。

⑧ 虐待・ヤングケアラー

虐待やヤングケアラーといった問題は、学校教育だけでは解決が難しい。こうした問題がある場合には、迅速に福祉機関に連絡することが義務付けられている。児童相談所や行政など他の職種や機関と連携していく必要がある。複雑な問題を学校だけで抱え込むのではなく、複数の目によるアセスメントと複数の手（多職種）による支援が必要である。

３．不登校の背景にある社会的要因

◇「登校すること」の自明性の喪失

登校することに対する考え方が変わり、柔軟になった。特にコロナ禍で学校が一斉休校となり、オンライン授業が普及した結果、この経験を通して「学校に行かなくても勉強はできる」「学校復帰だけが全てではない」という認識が広がってきた。学校外でもフリースクールやオンライン授業など、学びの場の選択肢が増えている。

◇不登校に対する「世間の目」

依然として不登校に対する偏見は根強く残っている。近所に不登校の子がいると、噂や偏見の対象になりがち

で、家庭内での問題や子どもの問題が推測されてしまうことがある。

４．不登校になるきっかけ−文科省の調査より−

文部科学省が毎年発表する「生徒指導上の問題に関する調査」より、教師は、小学校・中学校での不登校の主な要因は、「家庭」や「友人関係」「学業の不振」によるものであると考えており、いじめが原因での不登校はあまりいないと考えているのが分かる。しかし、実際にはもっといじめが原因での不登校が存在するのではないかという疑問が残る。どちらにせよ、不登校に関するデータや社会の背景を理解することで、より適切な対応を知ることができる。

不登校を経験した子どもたちが５年後にその当時を振り返った不登校のきっかけアンケートを実施したとある調査では、「あなたの不登校の原因は何でしたか？」との質問に対し、最も多い回答が「友人関係」で、次に「生活リズム」、その次に「勉強」と続いた。「先生との関係」や「部活に関する問題」といった回答も見られるが、「家庭の問題」は比較的少ないという結果となった。この結果から、子どもたちが考える自分自身の不登校のきっかけは、「友人関係」や「生活リズム」であると分かる。

令和２年度の不登校実態調査では、中学１年生時に不登校だった子どもたちが、中学２年生時に不登校に関してどう感じているか調査したところ、「身体の不調」が最も多く見られ、「勉強が分からない」「先生との関係」「友人関係」がその次に続いた。「自分でもよく分からない」という回答も多く、子どもたちが不登校の原因を特定できていないことが分かる。

このように、不登校の原因は多様であり、学校側から見ると家庭の問題が関係していると考える一方、子どもたちは友人関係や生活リズムが関係していると考えており、見る立場によって考え方が異なることが分かる。また、自分でもよく分からない場合も多く、本人がはっきりした理由を持っていない場合、不登校の理由を何度も聞くことで追い詰めてしまう可能性がある。理由を尋ねる際には注意・配慮が必要で、過去の原因を追求するよりも、現在の気持ちや生活状況に焦点を当てることが重要である。それに加えて、将来について考えられないという声もあるため、今の状況を理解し、必要なサポートを提供することが重要である。それに加えて、きっかけが解決しても、必ず登校できるわけではないことも覚えておきたい。

５．不登校の子どものこころと教師の気持ち

不登校の原因は一人ひとり異なり、子どもたちは、自分の状況を簡単には説明できないことがほとんどである。子どもたちは、自分の理由を言葉にすることが難しかったり、思い出したくない気持ちを抱えたりしている。そのため、理由を聞かれることが辛いと感じる子も多く、「もう聞かないでほしい」と反応することもある。親が初めは優しく聞いていても、次第に感情的になり、「なぜ行かないの？」と問い詰めることがあると、子どもはビビッてしまい、叱られていると感じてしまう。聞き方や回数に注意が必要で、一度は質問をして、反応がない場合は無理に追求せず、そのまま置いておくことが大切である。

具体的な事例として、中学３年生の女の子が「来週から学校に行こうと思う」と言った際、母親の期待が逆にプレッシャーとなり、不安を感じたケースもある。不登校の子どもたちは、親の態度を敏感に感じ取る。子どもたちは、親に対して「分かってほしい」「学校に行く自分も、行かない自分も認めてほしい」と思っており、親から「学校に行かないあなたも大好きだよ」というメッセージが届けば、子どもにとって大きな支えになるかもしれないが、親も本音では、できれば学校に行ってほしいと思っているため、親がそのメッセージをうまく伝えるのはとても難しいことである。

また、子どもたちは自分の気持ちを言葉にすることができないことも多く、ストレスや悩みが行動化や身体的な形で表現されることがある。行動化においては、必ずしも良い行動とは言えず、むしろ他人に迷惑をかけるような行動が見られる。具体的には、ガラスを割ったり、物を壊したりするなどの器物破損である。自分の内面的な攻撃を他者や社会に向けて気持ちを昇華させており、いじめなどの行動もその一例である。

一方で最近特に高校生において気になるのは、自分に攻撃を向けてしまう自傷行為が増えていることである。これは全国的に見られる現象ではないかと考えている。その中でも最近特に増えてきているのは薬の過剰摂取（ＯＤ）である。咳止めの薬や、鎮痛剤などを大量に購入し、大量に服用することで、嫌な気分を瞬間的に忘れようとする行為である。お酒や柑橘系の刺激の強い飲み物と一緒に薬を飲むと、副作用がより強く出たり、体に良くない影響が現れたりすることがある。こうした行為は非常に問題であり、注意が必要である。これらの薬はドラッグストアで簡単に購入でき、制限をかけたとしても安易に手に入ってしまうため、非常に危険である。

自傷行為には、リストカットやオーバードーズのほかに、自分で自分の毛を抜く抜毛症もある。これらはすべて行動化の一種であり、他者に対して向かうのも心配であるが、自分自身に向けられる場合も非常に心配である。これらは心の健康に対する重要なサインであり、注意が必要である。

もう一つの表現方法は、心の不調が身体に現れることを指す、身体的な症状だ。特に過敏性腸症候群や過呼吸がよく見られ、実際に多くの子どもたちが経験している。また、脱毛症も一例である。抜毛症は自分で髪の毛を抜いてしまうものだが、円形脱毛症は自分の意志とは関係なく髪の毛が抜けてしまうものである。ストレスが原因で髪の毛がなくなることがある。入試のストレスが原因で髪が抜けてしまった子どもがおり、受験のストレスが非常に大きいことを実感した。大人にも同様のことが言え、教師たちもストレスで胃炎や突発性難聴を経験することがある。疲れやストレスが原因で、身体的な症状が現れることがあるのである。本来なら、こうなる前に言葉で表現できれば良いのだが、それはなかなか簡単ではない。ここからいくつかのエピソードを紹介していきたい。

エピソード１　詩「母親」

詩のタイトルは「母親」。この子は中学２年生の女の子で、外ではとても愛想の良い可愛い子だったが、家ではお母さんに対して暴力的な態度を取っていた。

『母親』
暗い部屋に閉じこもった私に
灯をくれる人、
どんなに辛い言葉を投げかけても
温かな目で受け止めてくれる人
何も見ようとしない私の目を
そっと開いてくれる人
閉ざしたまんまの鉄のドアを
力いっぱいに開けてくれる人
いつだって私はそんな母を傷つけている
そして後悔する
大好きなのに傷つけてしまう
傷ついた母にも　泣きたいこともあるだろう
階段をのぼる途中　淋しくなって
立ち止まることもあるだろう…
お母さん　ごめんね…
P.S.　この詩は当時　母の寝顔を見て書きました

この詩は、当時の母の寝顔を見ながら書いたものであり、この子は、家庭の状況が非常に悪かった時期に、直接「ごめんね」と言えなかったのだが、母の寝顔を見てその思いを伝えようとしたのである。こういった「ごめんね」や「ありがとう」といった言葉は、直接言うのが難しいことがあり、この気持ちは、不登校の子どもだけでなく、一般的な親子の関係でも同じかもしれない。子どもの本音を直接言葉にするのは難しいことが多く、特にこの子の場合、表面上は強がっていて、お母さんに暴力を振るっていましたが、心の中では申し訳ない気持ちを抱えていたのである。その気持ちを、母親の寝顔を見ながら「ごめんね」と伝えたかったのだろう。

エピソード２　ロープの先

フリースクールに通っていた 12 歳の女の子の話である。彼女は学校に行けなかったが、担任の先生はとても熱心で家庭訪問や電話を通じて支援を行っていた。しかし、彼女はなかなか先生に会うことができず、ある日「私がロープの先を握っている」と言い出した。そのロープの先とは何かと思い、聞いてみると、担任の先生がそのロープの反対側にいるとのことだった。先生が引っ張ると、彼女は怖くなってロープを手放してしまうと話した。さらに、もし先生が「もういいや、ほっとくよ」と言い手を離した場合、ロープが完全に切れてしまうことも心配していた。彼女は「自分がもっと元気になったら、その時にロープを引っ張ってほしい」とも言っていた。最初は分からなかったが、後から考えると非常に難しいリクエストだと思った。この長いロープは、引っ張りすぎても困るし、引っ張らないと関係が切れてしまう、という微妙なバランスが必要なのである。子どもたち

は先生との関係において、常にロープを持ち続けているのだと感じた。教師として気になる生徒とのロープがどうなっているのか考えることは非常に大切である。

エピソード３　まだら

高校３年生の男の子は中学校には一度も行かなかったが、それでも高校に進学したいと考えていた。親と一緒に見学をした結果、とある通信制高校に出会い、入学試験に合格した。彼は高校に通い始めてから、一度も休むことなく、さらに生徒会長にも立候補するまでになったのだが、彼は「僕の気持ちはまだまだらです」と言ったのだ。「まだら」とは、真っ黒でも真っ白でもなく、いつ自分が不登校だった頃の状態に戻るかは分からないという意味である。彼の言葉から、不安を抱えながらも前進している姿が伝わってきた。この関わりから、すべての問題を解決しなければ前に進めないわけではないと学んだ。行きつ戻りつを繰り返しながら、不安を抱えたままでも、少しずつ進むことは可能なのである。重要なのは、不安をしっかり見つめながら進んでいくことであり、はしごの外し方・外し時が大事であるということだ。

６．思春期はSOSを出すのが苦手

思春期はおよそ小学校高学年から始まり、高校生まで続く、子どもから大人に変わる時期のことを指す。私が教えている大学生も、まだ思春期の影響を受けていることがある。

この時期は、体や心、社会的な立場が変わり、非常に難しい時期であり、特に、人に対して自分の気持ちを表現するのが苦手になる時期となる。この時期は悩みを抱えやすく、体が不安定になることや衝動的な感情、友達関係や親子関係の複雑さなどが影響する。反抗期や親離れ子離れもテーマとして現れてきて、難しい状況が続く。このような時期だからこそ、周囲に気持ちを早めに伝えてほしいのだが、それが簡単ではない。素直に言語化できない悩みは、身体的な症状や行動化として表れることが多いとされている。

思春期の子どもは、自分の気持ちを言語化するのが苦手である。例えば、「もう子どもじゃないから、親に甘えてはいけない」といったプライドや、反抗心が言葉を出しにくくしている。また、「大人に話しても解決しない」と感じて心を開かない子どもや、「言わなくても分かってほしい」と思う子もいる。こうした気持ちが、表現を難しくさせる要因となる。さらに、親や教師に心配をかけたくない、悲しませたくないといった配慮も、言語化を妨げることがある。言葉にしないと伝わらないことを理解しつつも、なかなか表現できないのが現実である。このため、悩みが身体的な症状や行動に現れることもある。

思春期は大人の支配を嫌う時期でもあり、大人の説教や干渉を鬱陶しく感じることが多い。特に教育現場では、教師が子どもに期待するあまり、上から目線で接してしまうことがあるため、子どもは反発を感じやすくなる。また、カウンセリングに対する抵抗感も強く、「自分は病気ではない」と思い込んでいる子どももいる。そのため、助けを求めることが難しい状況になることがある。カウンセリングを受けることが必ずしも弱さや異常さを意味するわけではないのだが、偏見や自己評価の低さから受け入れられないこともある。

こうした状況を理解し、周囲の大人はサポートを提供することが大切で、例えば、親や教師だけでなく、身近な先輩や地域の大人に相談できる環境が必要である。そうした支援があれば、悩みを言語化しやすくなり、解決に繋がることもある。

７．不登校との関わり　担任の先生の声

カウンセリングを通じて、子どもや親の気持ちを理解するだけでなく、担任の先生とも話すことが多く、先生からの情報は、カウンセリングにとって非常に有益で、教師自身も悩んでいることがある。共に考えることで、少しでも支援したいと考えている。

〈よくある先生方の悩み・ストレス〉

- 家庭訪問や電話連絡をするが、拒否されて・・・自分が嫌われているのではないかと感じることがある
- 歓迎されないことで自信喪失「プレッシャーになってもなあ・・・」
- 正解が分からない状態で、どう動いたらいいのか分からないもどかしさ
- 家庭の協力が得られない

  例えば、親が電話を拒否することや、「子どもは大丈夫だからほっといてほしい」と言われること、実際に、ある親が自分も不登校だった経験を持っているため、子どもに対しては「大丈夫だ」と言い切り、サポートを拒否した例もある。このような場合、こちらも手を差し伸べにくくなることがある。
- 他の生徒にも目を向けなければならず、一人の生徒に多くの時間を割くことが難しいというジレンマ
- 管理職や周りに評価されているのか気になる

・学校復帰がすべてではないと認識されているものの、具体的に何を目指すべきか分からず、迷ってしまう

８．私が出会った先生のエピソード

◇「あの子の顔が思い出せない…」

東京の公立中学校で出会った熱心な男性教師である。彼は、不登校の生徒がいるクラスの担任であり、毎日ではないが、家庭訪問や電話をかけるなど、一生懸命に支援していた。しかし、その生徒にはなかなか会えない状態が続いていた。お母さんはカウンセリングを受けに来ていたが、生徒本人には会うことができないと聞いていた。ある日、その教師が私のところに来て、「僕は教師失格だ」と言った。理由を聞くと、その不登校の生徒の顔を思い出せないとおっしゃったのである。担任として失格だと悩んでいた。生徒は半年以上学校に来ておらず、顔を思い出せないというのは確かに辛い状況であった。

私はその先生の強い責任感を感じる一方で、自分の反省点もあった。私は母親から子どもの状況を聞いていたが、その情報を担任の先生にしっかり伝えていなかったのである。もっと早くその生徒の家庭での様子を先生に伝えておくべきだった。それからは、母親からの情報をできる限り担任の先生に伝えるよう心がけた。その結果、先生は少しずつ元気を取り戻し、家庭訪問も再開された。最終的には、その生徒は学校には復帰しなかったが、放課後に先生に会いに来るようになった。この経験から、教師だけで頑張るのではなく、カウンセラーや周囲の人々と協力して支援することの大切さを実感した。

◇「M子、行くぞ！」

別の学校で出会った熱心な先生である。相談室でカウンセリングを受けているクラスの不登校のM子さんを、担任の先生は休み時間には必ず見に来てくれていた。教室には入れなかったものの、席替えの際には周囲に配慮し、友達と近くに座れるようにしていた。M子さんは、最後まで教室には入れなかったが、中学３年生になり卒業式に出たいと希望した。卒業式は特別なイベントであるため、何とか彼女を応援したいと思った。クラスメートと一緒に行列に入るのは難しいとのことであったため、卒業式の会場の手前の部屋で、M子さんと私が待ち、途中からそっと列に加わる予定であった。待っている間、彼女の顔色が変わり、震えているのがわかった。彼女がこんなに緊張しているのを見ると心配になり、「無理しなくてもいいかな」と思ったが、彼女が頑張ろうとしている姿を見て、どうしたらよいか悩んでいた。そんな中、卒業生たちが歩いてくる時間が来た。歩いてきた担任の先生が「M子、行くぞ！」と声をかけてくれた。彼女は「はい」と返事をして、しっかりと列に加わることができた。無事に卒業式を終え、「卒業しました」と挨拶をして帰っていったM子さんの姿を見て、先生の力強さを感じた。

この経験を通じて、先生とM子さんの信頼関係が深いことがわかった。カウンセラーとして、あのような場面で力強い後押しは難しいと思うが、先生ならではの配慮があったからこそ、M子さんは大きな一歩を踏み出せたのだと思う。

９．チームで取り組むことのメリット

◇利点：多面的理解、多面的関わり、連携・協力・支え合い

支援の形として、チームでの協力が必要不可欠である。担任の先生が一人で抱え込まずに、みんなで協力していくことが大切である。当たり前のことかもしれないが、チームで取り組むことのメリットは大きい。

１つは多面的な理解ができることである。担任だから見せる顔もあれば、担任だから見せない顔もある。一人では見えない視点を様々な人の視点を借りて、その子のいろいろな姿を理解することが必要である。以前、東京の公立中学校でカウンセラーをしていた時の、他の先生方からのサポートが本当に助かった経験がある。特に、学校の花壇を整備したり掃除をしたりする先生方が、子どもたちの様子をしっかり見ていてくれたことが印象に残っている。その学校は、事務室の先生たちも、子どもたちのさまざまな面を観察し、支援してくださっていた。学校は、さまざまな人が関わっているのが特徴であり、多様な視点を取り入れ、子どもたちを理解することが重要である。

多面的関わりは、複数で関わることで分担ができる利点がある。具体的には、厳しいことを言う人とそれをフォローする人に分かれて支援していくことである。

連携や協力、支え合いは、不登校への取り組みには時間がかかることが多く、すぐに結果が出るわけではない。何が正解かもわからないため、関わっている中で自信を失ったり、疲れを感じたりすることも少なくないなかで、誰かに話を聞いてもらったり、サポートを受けたりして、カウンセラーにお願いをするなど、先生の抱えている負担を少しでも分け合うことで、少し楽になるかもしれない。一人では難しいことでも、チームとして取り組む

ことで実現可能になる。
一方で、チーム作りの難しさも感じている。教師同士が閉じていては、協力は生まれない。カウンセラーと連携を図るためには、「この生徒がこういう状況で、今うまくいっていません」といった情報を共有することなど、自分のクラスの状況をしっかりと伝える勇気が必要である。自分の弱みを見せることには勇気が要るものであるし、もしそれを否定されたり、批判されたりすれば、一気に気持ちが萎えてしまうだろう。だからこそ、学校全体で見ていこうという雰囲気が重要になるのである。チーム作りには教師の努力と、学校全体での空気づくりの両方が必要だと感じている。

◇学校内外の機関も、有機的に"連携"を

また、学校以外の専門機関との有機的な連携も重要である。例えば、不登校の生徒がいる場合、教育センターや児童相談所、あるいは福祉機関などと連携を取り、実際に訪問することで、相手の雰囲気や取り組みを理解することができる。電話で情報を共有することも良いが、直接会ってコミュニケーションをとることで、より深い理解を得ることができる。少し手間かもしれないが、最初に時間をかけて知り合っておくことが大切である。

10. 多職種との連携

◇多職種による多様な支援

教育的な支援を行うのは学校の先生方であるが、心理的な支援は心理士やカウンセラー、病院などの医療機関による医療的支援や、児童相談所などの福祉機関による福祉的支援、さらには警察などの司法矯正的支援など、多様な専門家を活用することが大切である。学校内でもスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと協力することが重要。家庭や地域の力も非常に重要であり、不登校の専門機関だけでなく、児童館や図書館、公民館などが子どもたちの居場所になっていることもある。また、NPO などが親のサポートを行っている場合もある。このような学校外の専門機関とのネットワークを広げていくことが重要である。

◇ケース会議

ケース会議は、チームの代表として非常に重要な役割を果たす。一つのケースについて、関係する先生方やカウンセラー、ソーシャルワーカーが集まり、それぞれが掴んでいる情報を持ち寄り、情報を共有する会議であり、アセスメントを行う会議である。「この子の不登校は今どういう状態か」「何が必要か」といったことを考えることが重要である。学校のケース会議はそこで終わらず、次の一歩を必ず決めることが重要となる。例えば、「学校での関わりが難しい場合、カウンセリングに誘ってみましょうか」といった具合に、次のアクションを決めて実行に移すことが大切である。また、会議は長くならないようにし、短時間で効率的に進めることが求められる。忙しい学校の現状を考慮し、短い会議をこまめに開くことで、状況の確認や進捗を共有することが可能になる。

多職種で話し合いをする際には、お互いの専門性を尊重することがポイントとなる。教員とカウンセラーの専門性には違いがあり、見方が対立することもある。例えば、教員が「今の学年のうちに何とかしたい」と考える一方で、カウンセラーは「すぐには無理かもしれない」と感じることがあるため、そうした違いを理解し、リスペクトしながら話し合うことが重要である。

◇SOS を出す支援と SOS を受け取る力

子どもたちから SOS を出すことも大事であるが、子どもだけに任せるのではなく、チームで受け取る必要がある。教師は子どもたちのはっきりしない形での発信にも敏感である必要がある。例えば、普段はおとなしい子が最近おしゃべりになったり、元気な子が突然おとなしくなったりする場合、何か変化があるかもしれない。そういった状況に対し、感度を良くし、気づきを大切にして、子どもが一人の時に声をかけたり、他の同僚と情報を共有したり、家庭と連携することが重要である。気づきをそのまま放置せず、その「意味」を感じ取りながらチームで取り組んでいくことが求められる。

11. 高校段階における不登校支援

高校は義務教育ではないため、さまざまな難しさがある。特に、高校では授業の欠席が直接的に進路に影響を与えることになる。中学校では卒業が可能でも、高校ではそれが難しいため、留年の危機に直面することもある。また、高卒の資格が最低限の学歴とされる現代において、教育の機会がますます重要になっている。

最近では、コロナの影響もあり、広域通信制の学校が増えてきている。例えば、地域に関係なく他県の学校に通えるような仕組みや、毎日通わなくても学べる通信制の学校など選択肢が増えている。これにより、中退ではなく転校・転学という形での再スタートを切ることができる可能性も広がっている。

しかし、高校では思春期から青年期にかけての過渡期を迎え、青年期的な課題（生き方の問題）や多くの精神

的な問題を抱えたケースが多くなっている。うつ病や摂食障害など、学校だけでは対応できないケースも多く、義務教育段階に比べ、支援の場が限られている現状は大きな課題である。

◇求められる「進路の最適化」

新しいタイプの高校が増えている中で、例えばトリマーの資格を取れるコースや声優を目指すためのカリキュラムが設けられるなど、柔軟な学びの場が提供されつつある。しかし、最終的にはその子の適性や希望を尊重した選択が重要であり、その選択をする際には十分なサポートが求められる。子ども自身が自分に合った学校を選ぶことは非常に重要であり、「選ぶ力」が必要になってくる。学校説明会や見学会に参加し、子どもたちが実際にどんな学校なのか、どんな子が通っているのか、どんな先生がいるのかなどを知り、子どもたちが自分の感覚で「この学校なら行けそうだ」と感じることが大切である。

また、中学校では進路指導の際に新しいタイプの学校の情報をキャッチして、「こんな学校があるよ」と紹介してもらえると良いと思う。高校に入学後、転学や編入となった場合、どの学校が適切かを見極めるのが難しい状況もある。これらの子どもたちをどこでどう指導していくかが手薄になっている印象がある。学校説明会に参加するなどして親子で学校の雰囲気を感じ取り、実際に自分たちで選択するプロセスができると良い。

〈不登校の子どもを持つ保護者の思い〉

カウンセラーとして支援している中で、親と面談をする機会が多く、相談しに来てくれた親をどう支えるかはとても重要なポイントである。

12. 「子どもを支える人」も支えられる大切さ

子どもを支えるための代表である親もまた、悩みを抱えながら子どもを支えようとしているのが現実である。ここで、二つのケースを紹介する。

ケース１

小学校から不登校の男の子は、中学校に入学後もすぐに学校に行けなくなった。母親は毎週月曜日にカウンセリングを受け続け、最初は落ち込んでいたが、徐々に関係が築けていったある日、母親は「子どもに裏切られた」と話し出した。週末に子どもが「来週から学校に行こうかな」と言ったため、母親は子どもが学校に行く気になった嬉しくなり、子どもと一緒に学校に行く準備し、月曜日に備えた。

しかし、月曜日の朝、男の子は起きてこなかった。声をかけにいったところ、子どもは布団に隠れて泣いていた。母親にしてみると、期待が大きかったため、「裏切られた」と感じた。普段は短気ではない母親も、その時は期待や怒りやその裏にある不安や焦りなど複雑な感情が溢れ出てしまった。

話をじっくり聞いていると、母親は徐々に落ち着き、「本当に行く気だったんですよ」と子どもを擁護する言葉が出てきた。お母さんが思いを吐き出す場があって本当に良かったと思う。もしこの場がなかったら、母親が子どもに「裏切られた」と言ったことで、子どもはとても辛かっただろう。

このように、保護者が感情を吐き出せる場があることは重要で、親が抱える感情や悩みをしっかり受け止めて支えることが、子どもにとっても重要な支えとなる。カウンセリングを通じて親自身がリフレッシュし、再び子どもと向き合う力を持つことが大切である。

ケース２

高校生の不登校の子どもが自分の不登校体験談を語るシンポジウムに参加した際の話である。

質疑応答の時間に、ある母親が手を挙げ、「うちの子も不登校なんです。カウンセリングに行くべきでしょうか？」と質問した。私は親がカウンセリングに行くことは良いと思ったが、その時、体験談を語った高校生が手を挙げて言った。「僕は不登校の時、お母さんにはカウンセリングに行ってほしくなかった」と。その理由は、「知らないところで、自分の話を親がするのは気持ちよくないから」である。また、「不登校のせいで、親にカウンセリングを受けさせることは心苦しかった」とも語った。この気持ちを理解しつつ、どのように伝えるべきか考えた。結局、私は「子どものためにカウンセリングに行くのではなく、親御さん自身のために行くことが大切だ」と返した。親自身が自分の時間を使うことで、心の負担を軽減できると思ったからだ。

13. 保護者を支える意味

不登校を支えるためには、親が自分の気持ちを整理し、心の余裕を持つことが大切である。不登校の原因がすべて親にあるとは考えていない。確かに虐待やその他の深刻な問題が背景にある場合もあるが、全てのケースで

親が原因とは限らないと考えている。
ただし、親が変わることで子どもも変わることはよくある。たとえば、親がカウンセリングを受けて少し気持ちが楽になったり、自分の視点を変えたりすることができた、笑顔になることで、子どもにもポジティブな変化が現れることがある。カウンセリングでなくても、自分の趣味の時間を持ったり、外に働きに出たりすることでも良い。親が自分自身のために時間を使うことで、自己肯定感が高まる。これは「セルフコンパッション」と呼ばれ、自分を大切にすることを意味する。子どもは親の機嫌をよく見ているので、「お母さん、今日は機嫌がいいな」と思ったら、自然と子どもも笑顔になり、良い循環が生まれる。親が少しでも変わると、子どもに良い影響を与えることがあるのである。
一方で、マイナスの側面も存在する。親が不安を抱え、眉間にしわを寄せていると、子どもは居たたまれなくなる。「自分のせいで親が辛い思いをしている」と感じると、子どもも沈んでしまう。こうしたマイナスの循環をプラスに変えるためには、親がまず支援を受けたり、動いたりすることが重要である。

14．今後に向けて１
不登校に対して大事にすべきはアセスメントである。まず、その子どもがどんな状況にあり、何が辛いのかを理解することはもちろんだが、その子が持っている力や特性にも注目することが大切である。
特性というとネガティブなイメージが強くなりがちだが、プラスの面も含めて理解することが重要である。たとえば、学校では辛い思いをしているけども、家庭では親にサポートされている子どもがいるかもしれない。また、学校での人間関係が苦手でも、小さい子に対して優しい一面を持っているかもしれない。マイナスの側面だけでなく、プラスの側面も見つけて理解することが大切である。さらに、その子どもが育ってきた環境や学校の風土も考慮に入れたアセスメントが必要である。
また、多角的アセスメントは前述の多面的アセスメントと同じ。縦断的アセスメントとして、時間軸に沿った変化を見ていくことも大切である。去年までの状況と今の状況を比較することで、どのように変化しているのかを把握することができる。長所発見的アセスメントは、前述したと通り、プラス面や強みを見ていくことが重要です。マイナスだけでなく、子どもの強みを理解することが、支えになることも多い。
次に考えるべき視点は「困っているのは誰か？」ということだ。支援すべき対象として、子どもなのか親なのか、または先生なのか、どの視点から支援を始めるべきかを考えることも重要だ。もちろん、子ども、親、先生の三者全員を支えることが必要になる場合もありますが、どこから手をつけるかの順番も大切です。たとえば、子どもが変われば親も変わることがあるため、まずは子どもから支援を始めることも一つの方法である。また、子どもが来れない場合は親から支援を始めるのも良いだろう。さらに、困っている人は誰であるかという視点も大切。誰をまず支えるべきか考えることも重要である。どこから支援していくかの順番も非常に大事。

15．今後に向けて２
支援の代表は親や家族であり、家庭が孤立しないようにする必要がある。不登校の子どもがいると、親も学校に行きづらくなったり、親子が引きこもってしまったりすることがある。そうならないためにも、親を支えることで間接的に子どもを支えることができる。家庭まるごと支えていくために、どこかに繋がることが必要である。また、担任一人で抱え込むのではなく、学校全体でチームとして取り組むことが求められる。特定の担任だけに責任を負わせず、学校全体で、組織としてどのように支えるかを考えていくことが大切。
多くの子どもが休んでいる時は辛い思いをしているが、学校に通えるようになったり、次の支援につながったりしたときに振り返ると、「あの時は辛かったけど、自分のことを見つめる良い機会だった」と考える子どもも少なくない。また、「あの経験のおかげで他人の痛みを理解できるようになった」と話す子もいる。そう考えると不登校は辛い経験だが、その子にとって意味のある時間であり、立ち止まりの地点やターニングポイントになり得る。ただし、安易に楽観視はできない。その子にとって、その時期は本当に辛いものである。そのため、誰かが寄り添い、共に歩いてくれる存在が必要。親でも、先生でも、友人でも良いので、そういう伴走者がいることが重要だと考える。

〈図書紹介〉
◇学校ってなんだ？　不登校について知る本　　学研出版
◇不登校の理解と支援のためのハンドブック　　ミネルヴァ書房

第２部：不登校児童生徒の支援の実際

１．ミニケース検討①　（出典：菅野純（1995)「教師のためのカウンセリングゼミナール」）

以下に挙げる５つのミニケースについて、「どこに課題があり、どうすればよかったのか」についてグループディスカッションを行った。

> ◇Ａ男の場合
> Ａ男に電話で何が原因なのか尋ねたが要領を得ず、「明日は学校へ行く」という言葉を信じて待ったが、欠席。それが何回も続くうち、Ａ男は電話に出なくなり、親からも連絡も無くなった。気にはなりながらも時間ばかりが過ぎていった。

〈以下は各グループの発表内容〉

・こうなってしまう前に、日頃のコミュニケーションが大事であるという意見があった。
・電話でのやり取りは結構多いが、まず顔を見て、どんな表情で話すかということも確認が必要である。
・行くという言葉に対しては、来なかった場合のことも考えて想定しておく必要がある。
・「明日は学校に行く」という言葉だが、これは宣言っぽくなっており、約束として重くなりすぎる可能性がある。それ以外の話をして、コミュニケーションを図ることが大切である。
・学校に来ることができたら、居られる場所を作っておく。教室以外の場所や時間を選択させ、自分からいるということを大切にする必要がある。
・電話が来ることを待つだけでなく、家庭訪問をして生徒や保護者の様子を観察し、保護者に対してねぎらいの言葉をかけることが重要である。
・さらに、保護者の気持ちを聞き、これからどうしていきたいかを生徒本人と保護者から聞き取り、支援につなげていく。
・原因の追求をしてしまったところが課題であったと思う。本人も理由が分からないのに何が原因なのかと聞かれて、心を閉ざしてしまった可能性がある。
・担任が一人で抱え込んでしまったのではないかという推測もされる。
・どうすればよかったかという点については、原因を一緒に考えていければよかったということと、チームを組む観点から、担任の先生だけではなく、主任や養護教諭、もし部活に入っていれば部活の顧問の先生など、Ａ男にとって身近な存在の先生方でチームを組んで対応していけばよかったのではないか。

〈伊藤先生のコメント〉

休んでいる子にとって電話は、ほっておくと鳴り続けるものであり、攻撃的な道具のように感じられるかもしれない。電話よりも家庭訪問や実際に顔を見て話す方が良かったのかもしれない。電話が悪いわけではないが、連絡方法のバリエーションを考えることが大切であるというのが一点である。

また、原因を尋ねることについても、本人が分からないことが多いので、尋ねることで追い詰めてしまうことがある。明日学校に行くかと聞くことについても、約束させてしまっている。非行傾向の子どもには「明日来いよ」と軽く声をかけるのは効果的であるが、その声かけが必ずしも良いわけではない。Ａ男にとっては重かった。もう少し軽い話の方が良かった。

もし電話に出なかったり、親から連絡がなかった場合、状況が悪化してしまう。親に対してねぎらいの言葉をかけることが重要である。電話に出られない場合でも、「Ａ男君のことを気にしているよ」とメッセージを伝えることが大切である。本人が出なくても大丈夫なので、親と少し話すことで、安心感を与えることができる。

子どもが来たときに居られる場所の選択肢を示すことや、担任一人ではなく、チームで対応することが非常に重要であったと思う。

> ◇Ｂ子の場合
> クラスの女子生徒何人かに、毎朝Ｂ子の家に寄って連れてくるように指示したところ、Ｂ子の親より「娘の心を刺激するようなことはやめてほしい」と抗議の電話があった。

〈以下は各グループの発表内容〉

・クラスの女子生徒何人かに毎朝家に寄って連れてくるよう指示することが問題である。毎朝家に寄って連れてくるという指示は、無理矢理にでも連れてくることが予想されたり、B子にも毎日来られるといかなければならないとプレッシャーがかかる。
・毎朝家に寄るクラスの女子生徒の中に、うまくいっていない関係の子が含まれているかもしれない。
・事前に生徒の気持ちや親の承諾を考慮していない行動である。
・クラス全体の生徒にお願いするのではなく、仲の良い友達に頼む方が適切である。
・行く方にも意外と負担がある。
・E子さんのケースのように、逆に毎朝家によるクラスの女子生徒が「こんなことまでしてやっているのに」と感じることがあり、担任との関係が悪化してしまう可能性がある。
・B子さんと直接話ができるか確認しつつ、保護者ともおうちでの過ごし方や様子を確認しておくべきであった。また、保護者との情報交換を行い、信頼関係を築いておく必要があったのではないか。
・休んでいるB子さんの気持ちに誰かが寄り添うことが必要であるため、チームを作っての対応が必要ではないか。

〈伊藤先生のコメント〉

子どもが訪問するというパターンも考えられるが、高校生ぐらいになると自主的に行く場合もあると思う。しかし、B子さんの場合は、先生から生徒に指示して訪問を促すという点が少し難しいところである。指摘されたように、女子生徒何人かという人選の問題がある。人を選ぶ際に、仲の良い友達であれば問題ないが、中にいじめを行っている子や嫌な子がいる場合、B子さんにとって非常に辛いことになる。B子さんと保護者の双方の意向を尊重することが重要である。もし来てほしくないなら、無理に行かせる必要はない。B子さんや保護者を通じて気持ちを確認し、誰に来てもらうかを決めるのが最良の方法である。近所の子や学級委員を選ぶことが逆効果になることもある。学級委員のように目立つ存在が来ると、B子さんがあまり気持ちよくない場合もあるため、誰を選ぶかが重要である。

また、毎朝訪問するのも良くない。特に不登校の子にとっては、朝は特に負担が大きいからである。最初は放課後に訪問し、慣れてきたら朝の訪問も良いかもしれない。

B子さんをサポートするためにチームを作り、寄り添う人がいると良い。行く方も負担になるため、子どもたちに任せるのではなく、先生も動いてサポートすることが有効である。

◇C男の場合

「登校拒否はそっとしておいたほうがよい」とよく言われるので、電話もかけず様子を見守っていたところ、C男の前担任のところに母親から「今度の先生は冷たい。見捨てられた」との電話があった。

〈以下は各グループの発表内容〉
・生徒の様子を見守ろうとしていた担任の意思が保護者に対して気持ちを伝わっておらず、不信感を持ったのではないか。
・担任が一人でこの問題を抱えてしまい、どう対応すべきか分からないままになっていた可能性も指摘された。
・前担任と保護者の間に信頼関係が築かれていたと考えられるため、年度が変わる際に対応の内容を引き継ぐことが重要であった。
・年度始めを良い機会とし、家庭訪問や電話などのアプローチを行う必要があった。
・担任が一人で対応するのではなく、チームでのサポートが必要であった。周囲の担任や学年主任などが関与し、協力して支援することが必要だったのではないか。
・現担任と保護者の関係が悪化している場合、学年主任やスクールカウンセラーが間に入ることで、保護者や生徒とのコミュニケーションを円滑にすることが重要である。面談結果を担任と共有することで、今後の連絡方法について相談することが大切なのではないか。
・登校拒否について「そっとしておいた方が良い」という思い込みがあり、前の担任や母親との連携や情報共有ができていなかったことが挙げられる。
・前担任だけでなく、学年や学校内の他の教員からも情報を収集することが望ましい。もし部活動に参加していたり、学級外で関わっている場があれば、その様子をしっかり観察し、聞き取ることが大切である。

〈伊藤先生のコメント〉

「そっとしておいた方が良い」という一般論を信じてしまい、見守っているつもりでも、結果的には相手には

伝わらず、見捨てられたと感じさせてしまった点において、ボタンの掛け違いがあったと言える。

担任が変わる際には、前の担任から次の担任へ、子どもの状況や対応方法をきちんと申し送り、引き継ぐことが重要である。また、新しい担任が決まった際には、4 月中に家庭訪問や話し合いを行い、親子としっかりと連携を取ることが求められる。しかし、この手間が省かれてしまったことや、学校内の問題が影響している可能性がある。

チームでの対応が必要であり、担任だけでなく、学年主任やスクールカウンセラー、部活動顧問など関係職員全体でフォローしたり、C男君やC男君の親御さんの間に入り繋いでいく作業があれば、より良い対応ができたのではないかと考える。

◇D子の場合

D子の欠席が登校拒否症状とそっくりなため、母親を呼んで思春期病棟のある病院でみてもらうよう勧めると「ウチの子を精神病扱いするのか」と、父親が怒鳴り込んできた。

〈以下は各グループの発表内容〉

・保護者と学校の信頼関係が築かれる前に、病院受診を進めてしまったことが挙げられる。家庭訪問やスクールカウンセラーの活用といった段階を踏む前に病院受診を進めたことで、保護者にとっては親身さが足りないと感じてしまったのではないか。
・先生同士での情報共有やケース会議をもっと頻繁に実施するべきだった。病院受診を勧めた教師が一人で抱え込むのではなく、ケース会議を通じて管理職にも相談しながら対応するべきであった。
・生徒本人の気持ちや意見が反映されていない対応であったと思われる。したがって、生徒本人から直接話を聞き、その気持ちを理解した上で対応することが重要であった。
・本人や保護者と話をして、本人の気持ち、体調、生活リズムなどをよく聞くことが重要である。
・家庭状況からキーパーソンが誰で、誰に伝えると効果的かを見極めてから話を進めることが望ましいのではないか。
・受診が必要そうな場合でも、まずはスクールカウンセラーを利用できるという情報を提供したり、頭痛や腹痛などの身体症状があれば、かかりつけの内科医に相談することで、器質的な疾患の有無を確認し、必要に応じてその医師から診療内科への紹介を受けることができるのではないか。

〈伊藤先生のコメント〉

病院を勧めることは本当に難しい問題である。もちろん不登校に対して病院が必要な場合もあるが、全てのケースで病院が必要なわけではない。本人や親が「自分の症状に悩んでいる」と感じている時には病院受診が効果的だが、学校側が一方的に進めることは信頼関係が築かれていない中で行うべきではない。そのため、保護者が反発するのも理解できる。

精神科に対する抵抗感を持つ家庭が多いのが現実である。病院を勧める際には、なぜ病院が必要なのか、行くメリットをしっかり説明することが重要である。説明が不足していると、対立や誤解が生じやすくなる。そうならないために、スクールカウンセラーに繋ぐ、あるいは内科や心療内科、教育センターの相談室など、行きやすいところからアプローチを始めることが効果的である。特に緊急性がない場合は、段階を踏んで信頼関係を築きながら進めることが望ましい。親が納得しないまま病院を勧めると、理解を得るのが難しくなることが多い。さらに、先生が一人で抱え込まずに、ケース会議を開くことで、保護者や生徒の気持ちを考慮しながら対応を考えられたら良かった。保護者の反応にも配慮が必要であり、特に父親が強い意見を持っている場合は、母親が納得した上で情報を共有することが有効である。最初に母親に納得してもらい、その後で父親に説明できるような形が理想的だと考える。

◇E子の場合

親からの依頼もあって、毎朝E子の家に迎えに寄っていた女子グループが、「こんなにまでしてやっているのに、E子はちっとも私たちの気持ちに答えてくれない

〈以下は各グループの発表内容〉

・親からの依頼とあったが、親から学校に依頼があったのか、親から女子グループに直接依頼があったのか不明である。
・女子グループが迎えに行っていたということについて、学校側が知っていたのか、E子にとってはプレッシャ

ーだったのではないか。
・家庭と学校との連携が必要であり、Ｅ子の意思の確認と女子グループへの意思の確認も必要。
・女子グループへのフォローも必要であり、来ない時もあるということを伝えておく必要があったのではないか。
・親も学校へ行かせたいという思いが一緒になっているケースだと考えられる。
・Ｂ子さんと同様に、本人の主張や気持ちが不在となっていたため、そこを聞き取り、親のケアをすることがこのケースの改善につながると考えられる。
・今回、子どもが迎えに行くという方法が取られているが、生徒たちからの「こんなにまで」というような言葉が出る前に、漫然と続けるのではなく、定期的に教員が間に入って、Ｅ子さんと女子生徒の気持ちをつなぐような関わりをすることもできたのではないか。

〈伊藤先生のコメント〉

Ｅ子さんのケースでは、親からの依頼もあり、学校に頼んだのか、女子グループに直接頼んだのかが不明である。親は迎えに来てもらいたいと焦っているかもしれないが、Ｅ子さんの気持ちを考慮していない。このため、親からの依頼があっても、まずは「Ｅ子さんにはどうか」と確認することが重要である。

毎朝、女子グループが迎えに行く場合、誰が行くかやそのタイミングについても配慮が必要である。朝よりは放課後、負担を減らすために、一人または二人で行くのが望ましい。可能であれば、Ｅ子さん本人に「誰だったら大丈夫か」を確認することも重要だ。

生徒に頼んで行かせる場合は、事前に「会えないかもしれない」と説明し、フォローを行う必要がある。帰ってきた際には、感謝やねぎらいの言葉をかけるなど事後のフォローも必要。教師が間に入る場合はは、中途半端に任せず、しっかりとサポートし、本人と親、友達を結ぶ役割を果たすことが重要である。

２．最後に

親に対しては「自分に優しくし、自分自身をほっとさせる時間が大切」（セルフコンパッション）とお伝えしたが、これは先生方にも有効なことである。先生方のセルフコンパッションを大切にして欲しいと思う。

今現在、学校は非常に多忙な状況だが、時には余裕を持つ時間を作ることや、同僚と話し合ったり、全く異なる環境の友人と交流したりすることも重要である。そうした時間を持つことで、先生方が消耗しないよう心掛けることが大事である。

※　当日の講演録を文字起こしし、当部会で一部修正を加えたものです。

部　会　の　動　き

自　令和６年４月
至　令和７年３月

令和５年　６月１２日　令和５年度第１回役員会　　　　　　　　　　青森県立弘前実業高等学校
　　　　　９月　６日　令和５年度第２回役員会　　　　　　　　　　オンライン開催

第37回　研 究 大 会 講 座 一 覧

	講　　演
テ　ー　マ	「不登校の現状と課題」
講　　師	奈良女子大学　　教授　　伊藤　美奈子
記　録　者	青森県立八戸水産高等学校　　三上　志真夫　　田村　佳奈

研　究　テ　ー　マ

紀要(集)	年度	研究テーマ	会場	会員数・希望（一二計）	大会参加数	大会発表者数
57	24	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 … あたたかいかかわりづくりのために … ○「生徒指導コーディネーターとしての教育相談担当者の今後の役割」	青森県総合社会 教育センター	135	56	1
58	25	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 … あたたかいかかわりづくりのために … ○「子どもたちの命を守る」	青森県立図書館	132	76	1
59	26	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 …あたたかいかかわりづくりのために… ○「誰もが行きたくなる学校を創る」 －生徒指導・教育相談・特別支援をデザインする－	青森県立図書館	102	55	1
60	27	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 …あたたかいかかわりづくりのために… ○「学校現場における学級集団づくりの在り方 ～Q－Uを活用した学級づくり～」	青森中央学院大学	127	72	1
61	28	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 …あたたかいかかわりづくりのために… ○「インクルーシブな高校づくりの起点 ～教育相談の在り方を考える～」	アピオあおもり	134	65	0
62	29	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 …あたたかいかかわりづくりのために… ○「家族の問題解決」	アピオあおもり	147	69	0
63	30	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 …あたたかいかかわりづくりのために… ○「関係力を磨くGWTのすすめ！」	アピオあおもり	133	65	0
64	31 令和元	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 …あたたかいかかわりづくりのために… ○「教育相談・学級経営に活かすｸﾞﾙｰﾌﾟｱﾌﾟﾛｰﾁ」	青森県総合社会 教育センター	147	76	0
66	4	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 …あたたかいかかわりづくりのために… ○「チーム学校」の構築	青森県総合社会 教育センター	128	63	0
67	5	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 …あたたかいかかわりづくりのために… ○「不登校の現状と支援」	青森県総合社会 教育センター	126	61	0
68	6	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 ○「不登校の現状と課題」	青森県総合社会 教育センター	128	44	0